

# 幼稚園の適正人数

南 信 子



現在の日本の幼稚園教育において、一般的にいえることは、各

園の園児数は、当該年度の入園希望者数によって定まるのであって、各園の規模の大小も、教育をするための適正人数を考慮して決定されているというよりも、たいていは財政的な制約や園地獲得の条件等によってやむをえない状態で発足したといったものが多いようであり、定員あつてなきがごとく、その場、その時によって変えざるをえない状態ではないかと思う。こういった現実の中で、幼稚園の適正人数について考えてみることは意味のあることである。

適正人数はつぎにあげられる諸条件によって総合的に考えられなければならないし、それらの問題はたがいに深くかわりあっていることを知らなければならない。

## 一 幼稚園教育の目的の達成

幼稚園教育はいうまでもなく、知識や技術を教えることを目的とせず、人間の人格の基礎が形成される重要な時期に、人間として必要な基本的な生き方を教え、その生活態度や習慣を身につけるように助けることがねらいであり、しかも家庭教育では与えることのできない集団生活を通してそのねらいを達成することを期待しているのである。集団は子どもたちによって構成されているが、中心となっているのは教師である。

子ども同士、教師と子どもたち、こうした独特な環境の中で、ともに生きる感覚と意識を育てながら目的を達成しようとするのであるから、こうした観点にたつて幼稚園の適正人数を考えてみなければならないと思う。もちろん幼児はどんな大きさの集団の中で自分を確立することが可能であるか、集団の中で彼らの交わ

りはどのように展開するのか、その科学的な研究なくして適正人数を考えることができないが、まず、幼稚園教育のねらいとする点にしっかり立脚することが大切である。人間の人格は、人格とふれあつて形成されるのであり、人間らしい人格を育てるためには、何よりも人間的な交わりのできる環境でなければならない。おとなである教師が、幼い未熟なひとりひとりの人格にふれ、子どもたち同士も互いに人間としてふれあうためには、きわめて少数のグループにのみそれが可能であることは常識であるといつてよい。

## 二 保育内容とその方法

つぎに、幼稚園教育の目的を達成させる方法として、具体的に子どもたちになんか経験を与え、どのような保育形態によつてその経験を展開させるかが問題である。壇上になつて一斉に子どもに理解できる教訓を与えるのは、少しなれた技術をもつておれば、相手が数十人でもあまり支障を来たさなないかもしれない。あるいはテレビ番組を視聴させるだけならば形態をよく配慮すれば大型のテレビで三十人位は可能であろう。また歌をいっしょに歌うのは、ピアノの伴奏がしっかりしており、中心に教師がたつてよく指導すれば相当数の子どもを集中させて歌わせることができるであろう。

しかし自由遊びなどで子ども各自がめいめいの活動をする場合に、ひとりひとりをよく観察し、彼らに問題解決の能力を与えようとするならば、あまり多数では困難である。しかも幼稚園教育の中心となる形態は遊びであり、生活指導であるべきことは多くの人の意見の一致するところであるが、子どもの遊びのなかで、教育が果たす役割には非常に深い配慮と、個々に対する理解が根底に必要とされるのであり、生活指導はほとんど個人指導の意味をもっているときえ考えられる。こうして考えると幼稚園教育は何といつても少数主義によらなければ効果をあげることができないことはたしかである。集団で単にテレビを見たり、歌ったり、話をきいたりするプログラムだけでは幼稚園教育の目的を果たすことができないし、集団保育の価値を強調し、彼らが互いに集団の意識をもち、役割を分担し、話し合うことを基本に考えるとしても、彼らの発達段階からくる限界をみとめざるをえないのである。すなわち幼児の場合、彼ら同士が話し合い、互いに理解し合える範囲はきわめて少数であるからである。

このように、適正人数を考える視点は、その保育の内容と、それを展開させる保育の方法、形態によつて異なってくることを考えなければならぬ。

## 三 幼児の発達段階

幼児の社会性の発達による遊びの分類について研究されたものによると、幼児期は、ひとり遊びから、二人遊び、連合遊び、共同遊びへと発展していくといわれるが、幼児期の後半になってようやく数人から十人以内の共同遊びがあらわれ、それが可能になるわけであるから、きわめて年齢の低い幼児はおおぜいの集団の中にいたとしても、あまり互いにかかわりをもつことは少ないので、部屋の大きさ、あるいは教師の数によっては、自由な遊びをわりあいに支障なくすることができる点もあり得る。

しかし発達とともにグループができ、そのグループ構成によって子どもは互いに啓発され成長していく要素が大きいので、その自然発生的なグループを背後でよく調整し、それぞれの望ましい個性をよく発達させ問題解決の力が育つよう配慮するためには、一人の教師にヘルパーをつけたとしても、五、六人ずつのグループが三つ四つある程度が可能な限界となるのではないかと思う。

#### 四 クラス組織

幼児期は、その生活のほとんどの時間を家庭で過ごし、幼稚園という集団生活に初めて入るのである。ところが現在の家庭における家族の人数は非常に少ない核家族となりつつある。大家族であっても十人をこえる家庭は少ないのではないかと思う。そうした家庭の生活から第一歩をふみだし、未経験の生活に入る幼児の

ために、あまり急激な変化を与えないことが望ましい。この観点にたつて、幼稚園の学校的性格をだそうとするならば、その適正人数はおのずと限定されるのではなからうか。

しかしまたあまり少ない人数では、ふれあう個性の幅がせまくなるので、教育の効果を十分にあげることができない点もあり得るわけである。女児ばかりが多いクラスに男児三、四名しかいないといった状態では、問題も多いので、そのバランスを考えたみると、地域の要求で入園希望者の多い場合には、同じ年齢の子どもたちのクラスの数を多くして、幼稚園全体の人数をふやすことを考えなければならぬ。

このクラス単位の教育が徹底しており、そのために設備がととのえられておれば、幼稚園全体としては、その地域の要求や、施設、設備、通園等の問題に支障のない程度に規模を大きくすることも無理ではないと思う。しかしクラスの数は多く、保育内容はほかのクラスと合同で一斉にする点が多く、設備や教師の人数が十分でないのでは、いわゆるマンモス幼稚園の教育の危機機といつて過言ではない。

アメリカの三歳児のためのナースリースクール、年少のためのジュニア・キンダーガーデン、年長のためのシニア・キンダーガーデンの組織のように、それぞれ独立した形態で保育を行なうだけでなく、建物も設備も別に持ち、行き届いた教育をすることが

できるようになっているのは、こうしたことについてのよい参考になると思う。

日本の幼稚園は年齢を三、四、五歳児を対象とし、しかも一つの施設で、一つの教育課程で、希望者の多いところはマンモス化、少ないところでは過疎化して混合保育をするといった教育では非常に問題があるのである。行政的に現代の住宅の分布の実態とその対象人数に即応して教育の問題を考えることが急務である。これは教育全体の問題として社会の関心事となり、よい解決の道が示されなければならないと思う。

地域の実態により、規模の大小が考えられ、その適正配置がなされ、一つの園の適正人数が考慮されることが大切である。それにしても、幼稚園設置基準に示される一学級四十人以下を原則とするということは問題があると思う。それは前述した観点から考えるからである。今や小学校でも一組四十人以下を限度とするのが常識であるから、幼稚園についてはむしろのことである。

## 五 教師の人数

以上すべての問題と直接、密接なかわりをもっているのは教師の人数の問題である。一つの考え方は、幼児の場合、一つの集団に一人の教師が適当か、一人以上いることが望ましいかという問題である。最近小学校教育におけるチーム・ティーチングの研

究がなされているが、幼児教育にこの原理を適用するとどんなことになるのか。知識や技術の教育ではないという観点にたつと、この問題はいささか不利のようであるが、教師といっても千差万別の個性と人格をもっているので、在園期間中、おもにただひとりの教師の感化だけを受けるといふことは果たしてどうか。幼稚園の家庭的性格を考えても、あらゆる機会をつくって、クラスの教師以外の教師とも接触をもつことは大切なことである。

三歳児の入園当初は、まず一人の教師に結びつくことが、その教育の効果をあげるに重要であるが、漸次、視野をひろげさせることが必要となってくる。そこでクラスに二人の教師がよいチームワークをとるならば、その集団の人数も、一人で担当する場合と少しちがってもよいのではないかと思う。

教師の人数が一人である場合には対象である幼児の年齢、クラス構成員の状態によってその人数が考えられるべきであり、三歳児で十人平均、四歳児で十五人、五歳児で二十人等、今日までの研究の例等を参考にし、保育室の大きさ、設備等、その他の条件を総合的に問題とすることが大切である。また教師といっても、短期大学を卒業して最初の年の経験をする教師の場合と、いわゆる成熟した教師の場合とで配慮されなければならないということ、は、保育というわざの特質から考えて当然であるように思う。